朝鮮通信使の迎接状況に関する研究
－宝暦年間における通信使行列と彦根－

K00042　金　佐智子

Ⅰ　はじめに

Ⅰ－1　研究の背景と目的

暗い過去のわだかまりにより、日本と韓国の間には、距離があるように見えていたが 2002 年のW杯サッカーの日韓共同開催などにより、日韓の相互理解と心の交流の動きが活発に行われ始めてきた。近世、唯一の国交国であった李氏朝鮮からの通信使を紐解いていくことで、より両国を理解できると思う。またさらに、両国の共通歴史遺産として、通信使施設を評価するという動きもある。しかし現在のところ、あまり建築史や都市研究の視点から解明されてない。

そこで、今回、朝鮮通信使宿泊施設の現存施設を明らかにし、本陣などの建築がない中で、朝鮮通信使を迎接し、今でも通信使施設の遺構が多い滋賀県彦根市を題材に、宿泊施設と迎接の様子をハードとソフトの両面から解明していこうと思う。

Ⅰ－2　朝鮮通信使と行路

朝鮮通信使とは、「信（よしみ）を通わせる」との意味を持つ親善使節である。江戸時代に初めて日本を訪れたのは、慶長 12 年（1607）。以降文化８年（1811）までの約２００年の間に 12 回日本を訪れている。鎖国体制において日本が外交関係をもつ数少ない国から祝賀の使節を招くことは、将軍の権威を一層高めることになるため、幕府は通信使一行を丁重に迎えた。

通信使一行は 300 名から 500 名にのぼり、対馬の宗氏の同行で、船で九州の関門海峡を通り瀬戸内海に入る。大阪からか川船に乗り換え、淀浦に上陸して京都に行く。

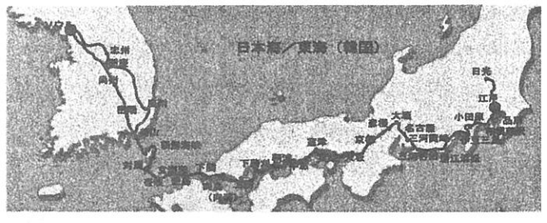


図１　朝鮮通信使行路

京都より大津、琵琶湖畔の朝鮮人街道を通り、彦根を経て中仙道に入る。大垣を経て南下し、名古屋に入り、ここからは東海道を下り、江戸へ向かうのである。

彦根は徳川譜代の井伊氏が治めている三十五万石の城下町で西国、北陸、東海道方面への分岐点にあり、かつて石田光成の佐和山城のあったところである。朝鮮通信使が通った道が、今でも朝鮮人街道として残っている。

Ⅰ－3　研究の方法

(1)　朝鮮通信使施設の現存状況

宿泊施設、休憩施設を明確にし、現存状況を整理する。

(2)　彦根の迎接状況

ハード面

① 彦根市立図書館蔵「朝鮮人帰国於彦根役割」宝暦 13（1763）年の分析

第 11 回宝暦年間の朝鮮通信使の宿泊施設を解明する。

② 朝鮮通信使の宿泊施設の調査（表１）

彦根において通信使が宿泊し現存する寺院遺構の実測調査をし、その当時の様子に近い状態に復原し、両国共通の歴史遺産として、建築の基本資料を作成する。

表１

	宗安寺	大信寺	善照寺*
建立年代	１７０２年	１７０９年	１７０７年
所在地	彦根市本町	彦根市本町	彦根市本町
調査実施日	H14　12/12 H15　10/7	H15　10/6	H15　9/9

ソフト面

③ 彦根城博物館蔵　伝馬町文書「用留」類の分析

通信使行列を可能にした、伝馬制度とそれをバックアップする助郷のシステムを解明し、三百名を超えた通信使一行をどのように受け入れ、宿継ぎしていったかを明確にする。

④ 同「伝馬町絵図」の分析

伝馬町の町割構成を図面にし、問屋・丁代・横目・馬持位置を明確にし、役負担の分析を行う。

指導教員　伊藤　洋子 教授

Ⅱ　朝鮮通信使施設の現存状況

表２　迎接宿泊施設の現存状況

泊休	滞在地	主な三使宿館	現状
泊	対馬府中	流芳院・海岸寺・太平寺・	流芳院　× その他明治以降再建
泊	壱岐風本浦	茶屋・聖母坊・龍宮寺	×
泊	筑前藍島	客館	×
泊	長門赤間関	阿弥陀寺	赤間神宮(明治以後)
泊	周防上関	茶屋	×
泊	安芸蒲刈	茶屋	×（役宅は現存）
泊	備後鞆浦	阿弥陀寺 福禅寺（国重要史跡）	○
泊	備前牛窓	本蓮寺（国重要史跡） 茶屋	本蓮寺　○
泊	播磨室津	茶屋	×
	摂津兵庫	絵屋右近右衛門・茶屋	×
泊	摂津大阪	西本願寺津村別院	再建（1962）
泊	山城京	大徳寺天瑞院	×
		本国寺	山科に移転
休	大津	本長寺	○
泊	近江守山	東門院	再建(1986 年焼失後)
休	近江八幡	本願寺八幡別院	×
泊	近江彦根	宗安寺	○
休	美濃今須	本陣伊藤五郎次・茶屋	×
泊	美濃大垣	全昌寺	○（縮小）
休	美濃洲股	茶屋	×
泊	尾張名古屋	性高院	○（移転縮小）
		大光寺	再建（戦後）
休	尾張鳴海	本陣	×
泊	三河岡崎	茶屋	×
休	三河赤坂	茶屋	×
泊	三河吉田	悟真寺	再建（戦後）
休	遠江新居	本陣	×
泊	遠江浜松	杉浦助右衛門方本陣 茶屋	×
休	遠江見附	西光寺	再建
泊	遠江掛川	摂津守茶屋	×
休	遠江金谷	茶屋	×
泊	駿河藤枝	洞雲寺・衛門	洞雲寺再建(大正期)
		本陣青島治右	×
休	駿河府中	宝泰寺	再建
泊	駿河江尻	清見寺（国重要史跡）	19C 再建（山門以外）
		本陣・茶屋	×
休	遠江吉原	本陣・茶屋	×
泊	伊豆三島	六大夫方・茶屋	×
休	遠江箱根	茶屋	×
泊	遠江小田原	七右衛門方・茶屋	×
休	相模大磯	才三郎・茶屋	×
泊	相模藤沢	源右衛門方・茶屋	×
休	武蔵神奈川	茶屋（～正徳度）	×
泊	武蔵品川	東海寺玄性院（享保度	縮小(明治以後)
休	武蔵江戸	本誓寺	深川移転
泊		東本願寺（正徳度～）	寺域縮小

通信使の三使の宿となる施設は、大規模な寺院か茶屋（臨時に建てた、若しくは藩主所有のもの）である。宿泊・休憩には、参勤交代用の本陣や脇本陣が用いられることは、あまりなかった。

現存する施設は少ない。またその中で、比較的、現存状況がよいのは、海路では鞆浦・牛窓、陸路では彦根のみである。

Ⅲ　彦根の迎接状況　ハード面の調査対象

Ⅲ－1　「朝鮮人帰国於彦根役割」（宝暦 13 年）

「朝鮮人帰国於役割」（宝暦 13 年）より、第 11 回朝鮮通信使が宿泊した施設を表２に示す。

表３　宿泊施設（宝暦度朝鮮通信使行列）

三使宿	宗安寺
中官宿	大信寺
下官宿	明性寺・蓮華寺
長老宿	江国寺・長松院
通詞宿	蓮華寺・願通寺・白壁町　源右衛門 職人町　伝兵衛・上魚屋町　久佐衛門 下魚屋町　小武半四郎・本町　磯部三郎兵衛
通詞下知人宿	白壁町　伝次・上魚屋町　松原庄右衛門
対馬守宿	林吉兵衛

＊表１の善照寺は寛延元年（1748）に長老宿として使用された。
（宗安寺蔵「日本国彦根における朝鮮通信使接待について」竹内　眞道）

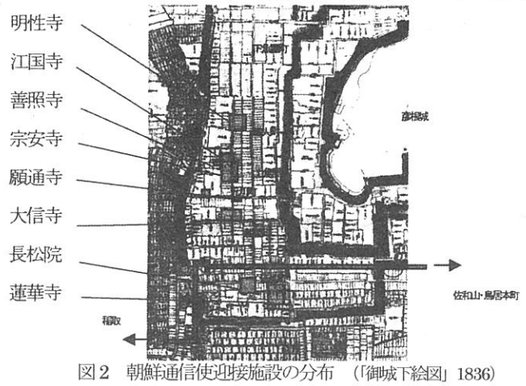


図２　朝鮮通信使迎接施設の分布　（「御城下絵図」1836）

Ⅲ－2　実測調査

表３中、現存する三ヶ寺の実測調査および復元考察を以下に示す。

① 宗安寺

井伊直政の正室東梅院が両親の菩提を弔うため、慶長５年（1600）関ヶ原戦役後、安国寺を佐和山に移し、宗安寺と改名したもので、慶長８年(1603)

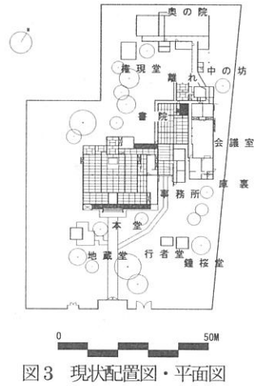
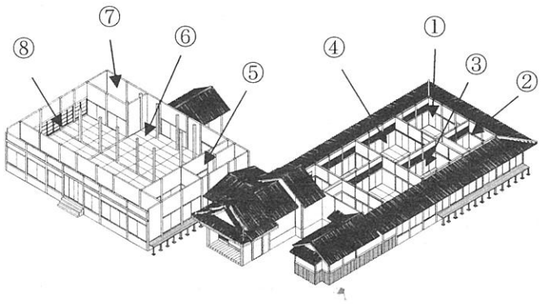


図３　現状配置図・平面図

彦根城築城にともない再度現地に移された。

本堂は、元禄大火後、元禄15年（1702）に長浜城附属御殿を拝領したものである。間口10間半、奥行8間半の平入り入母屋造り本瓦葺である。平面は前面の広縁部分に向拝1間を有し、整形6室構成を基本としている。

現書院は明治10年ごろ大修理が行われた。三使が宿泊したのは書院とされている。「宗安寺文書」より三使旅館の宗安寺には三使の他に、上々官・上判事・押物判事・次上判事・護衛軍官・良医・医員等の上官も宿泊したとされている。部屋の割り当てを図4に示す。三使や上々官等の上官たちの部屋にはそれぞれ湯殿と雪隠が建てられていた。



①	三使居場所	⑤	通詞下知役・通詞居場所
②	子童	⑥	対馬藩居場所
③	良医・医員・次官居場	⑦	所上々官居場所
④	上官護衛軍官居場	⑧	所上判事・押物判事・次上判事居場所

図4　居場所図

② 大信寺

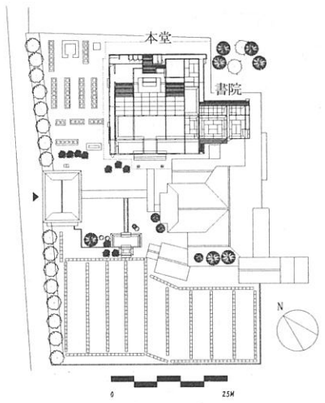


図5　現状配置図・平面図

慶長年間、井伊直正に随行して彦根に来た上野国高崎大信寺の照栄が開いた寺院である。

本堂は元禄大火後、宝永6年（1709）に再建されたと伝えられている。平面形式は、浄土宗本堂の形式であり、内陣奥行が深く、内外陣境の柱は建具で仕切らず、開放的である。本堂東南に書院を付設する。

大信寺は中官の宿泊施設であった。

③ 善照寺

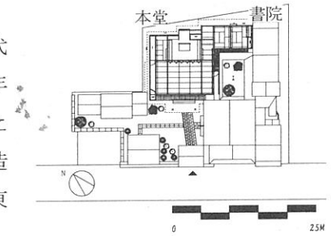


図6　現状配置図・平面図

本堂は、現住職先代の古記録より宝永4年（1707）に建てられたとされている。基本構造は6間×6間で、本堂東側に書院を付設する。

善照寺は、長老の宿泊施設であった。

Ⅳ　彦根の迎接状況　ソフト面の調査対象

Ⅳ—1　伝馬町

彦根城下の東側に船入と高宮口御門をつなぐ一直線の道が通り、中ほどに切通口があり切通口・高宮口の二つの門のちょうど中央に伝馬町がある。舟入から城下の道に出る道は佐和山城を目指し、鳥居本宿で中山道に合流する。高宮口御門から進んでいくと中山道に合流する。この鳥居本・高宮間を彦根城下に迂回する脇街道は中山道の両側から、「彦根道・朝鮮人街道」と呼ばれた。

伝馬町とは伝馬役を勤める町という意味である。伝馬とは、街道の一区間ごとに公用の運送に使う馬を常に準備しておき、宿継とは、必要な場合にその馬によって宿を順送りに運ぶシステムのことである。彦根城下の伝馬町は三郎左衛門が問屋を勤め、城下の荷物を中山道の宿まで運ぶ人馬が常に置かれていた。彦根宿は準宿場の扱いを受け25人の人足と、25疋の伝馬を備えていた。これらは伝馬町民の義務であった。

Ⅳ−2　「古文書」の分析

① 伝馬宿継と朝鮮通信使

朝鮮通信使一行の様に大人数を宿継しなくてはならないときは彦根藩領に属する番場・鳥居本・高宮・愛知川の4宿及び助郷において人馬を確保した。定助郷は番場21ヶ村、鳥居本29ヶ村、高宮19ヶ村・愛知川20ヶ村を数える。第11回宝暦年間の前回、第10回延享5年（1748）の通信使行列までは、この伝馬制度を利用したものであり伝馬と人足の徴発により行列の輸送力を確保したのである。

朝鮮通信使を迎接するには、人足460人、馬1169疋要した。内訳を表3に示す。この数字は、延享の往路の入用であるが、帰路の際にはさらに多数の人馬を要した。人馬の提供は、番場・鳥居本・高宮・愛知川の4宿は、それぞれ、50疋ずつで合計200疋、彦根宿25疋、残り844疋をそれぞれの助郷から出した。

表4　要求された人足・馬の数（延享5年4月）

	通信使方	対馬守用	両長老用	通詞用	合計
人足	260人	200人			460人
荷物馬	600疋		36疋	46疋	
馬	187疋	300疋			1169疋

② 伝馬町人口の衰退と18世紀の状態

朝鮮人行列の輸送を負担してきた、彦根伝馬町の18世紀の状態を史料より人口、拝借米願い、伝馬町絵図の内容によって明らかにする。

a　人口

	家持	借屋	合計	人口
元禄8年（1695）	34軒	68軒	102軒	442人
明和3年（1766）	30軒	48軒	78軒	328人
弘化3年（1846）	27軒	26軒	53軒	212人

b　宝暦十一巳年（1761）「朝鮮人御用」宝暦11年

4月29日
　此度当町馬持九人之者共　附荷物等無数困窮仕候二付御情愍之御願申上候訳　再応御吟味被為仰渡　御尤至極二存候　然処十八年已然子年御拝借米被　仰付被下置候節ハ馬壱疋二御蔵米三俵ツ々被下置候共　当年之儀ハ殊之外難儀至極仕候間　難卒御慈悲を以馬壱疋二五俵ツ々御拝借米仕候様二被為　仰付被下置候ハ々難有可奉存候（以下省略）
同5月4日　御指紙写
　馬壱疋二三俵ツ々拝借米被仰付候間（以下略）

この史料より、18年以前の寛保3年（1743）にも拝借米をし、宝暦11年にも同様に馬1匹につき、3俵の拝借米が認められ、午年暮〜申年暮（1762〜1764暮）で返納する約束をしたことが分かる。

c　「伝馬町絵図」（寛政年間）の分析

「伝馬町絵図」には、屋敷の規模・軒役・住居借家裏借家などが記載されており、それを表4、図7に示す。

屋敷の町割は奥行13間で例外を除いては統一されている。表3により、2.5〜3.5間は半役、4〜6間は一軒役、11間は二軒役、13間は三軒役であることがわかる。

表5　間口と軒役の関係

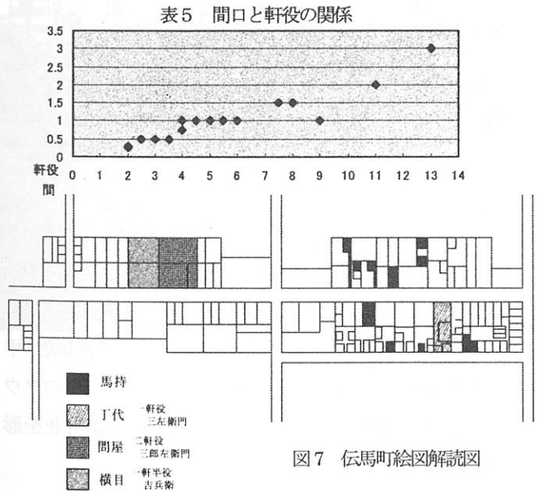


図7　伝馬町絵図解読図

問屋：三郎左衛門、丁代：三左衛門、横目：吉兵衛、馬持の位置を図7に示す。馬持は、借家人が多かったことが分かる。また、馬持も9人しかいない。18世紀後半、彦根伝馬町の財政は、逼迫していたことがうかがえる。

③ 朝鮮人行列　人馬一式請負入札

前記により伝馬町の人口と経済の衰退が明らかになったが、朝鮮人行列の実施にも変化が表れた。

「朝鮮人御用」午（1762）6月9日
来未年朝鮮人来朝之節　道中人馬之儀請負二申付間城州淀より江戸迄来朝帰国共一式請負届之ものは七月中旬迄二弾正少弼宅江　羅出注文書写取可仕入札者也

朝鮮通信使を受け入れることができる財政がなく、上記史料により宝暦年間には、入札による請負を実施したことがわかる。

Ⅴ　結論

本研究で明らかになったことを以下に示す。

- 通信使行列は、25箇所以上の地域に宿泊し、休憩箇所も入れると50箇所以上の地域の施設を利用したが、今でも当時の遺構が残る施設は、少ない。
- 滋賀県彦根市には、三使の宿泊施設宗安寺をはじめ大信寺・善照寺が現存する。この寺院は、朝鮮通信使の遺構として価値あるものである。然し、近世寺院ということでこれまであまり評価されてこなかった。
- 通信使行列の宿継は伝馬制度を利用したものであり伝馬と人足の徴発により行列の輸送力を確保した。
- 18世紀後半、伝馬町は衰退してく。通信使迎接の負担の大きさが、伝馬町を衰退させた一要因であったと考えられる。それに伴い伝馬制度が機能しにくくなり始めていった。第11回通信使からは、道中人馬請負体制が変更された。

朝鮮通信使一行は、江戸時代の国際親善の大行事であった。江戸時代の衰退とともに朝鮮通信使は、幕を閉じたが、200年の長きにわたり12回も執行できた迎接体制は優れていたといえる。また、役負担の問題など朝鮮通信使一行がわが国日本に与えた影響は大きいものであった。

参考文献
「彦根の近世社寺建築」彦根市教育委員会 1983年
「彦根の歴史—街道と町並み—」　彦根史談会
「朝鮮通信使の軌跡」　中尾宏
「朝鮮通信使と壬辰倭乱」仲尾宏